

第9回 日韓政治思想学会 国際共同学会議

『善き生と公共性』

会期：2010年7月2日(金)～7月3日(土)

場所：淑明女子大学 (Sookmyung Women's University). Centennial Hall
(building 18) 6th floor Shinhan Bank Hall

主催：韓国政治思想学会, 日本政治思想学会

7月2日(金)

第1部 西洋における善き生と公共性 (午前10:00-午後12:30)

/ 司会：大久保健晴 (明治大学)

①「プラトンにおける哲人王の失踪と善き生の意味変化」

PARK, Sung-Woo (Chungang Univ.) / 討論：平石耕 (成蹊大学)

②「共和制イングランドの成立とレヴェラーズの政治理念」

大澤麦 (首都大学東京) / 討論：LEE, Byung-Taek (Seoul National Univ.)

③「国家と公共性、善き生-マキアヴェリの国家理論-」

KIM, Kyung-Hee (Sungshin Women's Univ.) / 討論：辻康夫 (北海道大学)

お昼 (午後12:30-1:30)

第2部 現代の市民社会と公共性1 (午後1:30-3:30)

/ 司会：YANG, Seung-Tae (Ehwa Women's Univ.)

④「公共圏と言語-ハーバーマス、アレント、そしてカント-」

愛甲雄一 (成蹊大学) / 討論：JUNG, Ho-Won (Yonsei Univ.)

⑤「宗教的なるものと公共性・公共圏-チャールズ・テイラーのキリスト教論を中心に-」

辻康夫 (北海道大学) / 討論：KIM, Dong-Ha (Seogang Univ.)

第3部 現代の市民社会と公共性2 (午後3:30-5:30)

/ 司会：米原謙 (大阪大学)

⑥「公共性、善き生、そして公的幸福」

KIM, Sun-Wook (Swoongsil Univ.) / 討論：大久保健晴 (明治大学)

⑦「福祉、多様性、シチズンシップ-現代英国の active citizenship 論を中心に-」

平石耕 (成蹊大学) / 討論：KIM, Nam-Kuk (Korea Univ.)

7月3日(土)

第4部 東アジアにおける善き生と公共性 (午前10:00-午後12:30)

/ 司会：LEE, Jong-Eun (Kookmin Univ.)

⑧「荻生徂徠と本居宣長の言語論と政治論—古の理想世界における公共性と善き生—」

相原耕作 (神奈川大学) / 討論：PARK, Hong-Kyu (Korea Univ.)

⑨「近世東アジアにおける公共的な生と倫理」

KOH, Hee-Tak (Yonsei Univ.) / 討論：米原謙 (大阪大学)

⑩「マックス・ウェーバーの東アジア観における公共性の問題-彼の儒教理解に対するひとつの批判的再構成」

CHOI, Chi-Won (Korea Univ.) / 討論：亀嶋庸一 (成蹊大学)

お昼 (午後12:30-3:00)

第5部：総合討論 (午後3:30-5:30)

/ 司会：JUN, Kyung-Ohk (Sookmyung Women's Univ.)

亀嶋庸一 (成蹊大学)

(敬称

略)

第9回日韓共同学会報告

大久保健晴（明治大学）

本年7月2日（金）、3日（土）の2日にわたって、第9回日本・韓国・政治思想学会国際学会が、韓国・ソウルの淑明女子大学校(Sookmyung Women's Univ.)、にて開催された。本年度のテーマは、『善き生と公共性』である。

近年の世界的な経済不況を受けて、市場中心主義や、ネオ・リベラリズムへの批判的な捉え直しが進むなか、今一度、公共的な政治空間のなかで、「善き生」とは何かが問われている。今回の会議では、そうした共通の問題意識のもと、西洋において「善き生」と「公共性」を巡り、いかなる議論が積み重ねられてきたのか、その淵源に溯りながら検討を行うとともに、それとの対照のなかで、儒学など東アジアにおける思想的伝統の見直しが試みられた。そしてその成果をもとに、言語、宗教、社会運動、シティズンシップ、福祉など、多角的な視座から、現代的な諸課題について政治理論的な考察が加えられた。

ともすれば実践的な提言に傾斜しがちなテーマであるが、どの報告においても、史料やテキストの深い読解を通じて、内容豊かな洞察が提示され、実り多き議論が展開された。

第1部では、「西洋における善き生と公共性」を主題に、議論が行われた。PARK, Sung-Woo 報告は、一般的に認識論の問題を扱っていると考えられる『テアイトス』を、ソクラテスの「善き生」の哲学的弁明として解釈しようとしたものである。そこから、ソフィストや、数学者・自然哲学者の生とは異なる、産婆術や討論に基づく知の在り方に光が当てられた。大澤報告では、国王チャールズ一世処刑（1649年1月）後の共和制イングランド成立を巡って、レヴェラーズの成文憲法草案『人民協約』を中心に考察がなされた。「臣従契約」がデ・ファクトに存在する共和制の正当性を事後的に調達するためのものであったのに対して、『人民協約』は新たに設立される政治社会への参加を呼び掛けて署名を求めるものであったことが指摘され、国家を「良心の自由」をはじめとする自然権のもとに基礎付ける試みの政治思想史的意義について議論がなされた。KIM, Kyung-Hee 報告では、政治体論の伝統にマキャベリの思想を位置付け、virtu 概念を中心にその特質を解明するなかで、伝統的な政治体論と決別し、有機的な調和や平和ではなく、むしろ緊張関係のもとに生成する活気のある生を探求した、マキャベリの姿が析出された。

第2部は、「現代の市民社会と公共性」をテーマとする。愛甲報告は、「公共圏における言語」を主題に、ハーバーマス、アレントとの比較のもと、言語の多様性が平等なコミュニケーションを阻害していることについて先駆的な洞察を与えた思想家として、カントを取り上げる。その上で、カントにおいてこの言語の多様性を巡る議論が、ヘルダーとの論争のなかで形作られたものであり、その進展が世界共和国構想からの撤退と連関性を持つことが明らかにされる。辻報告は、チャールズ・テイラーの近著『世俗の時代』を手がかりに、現代社会における「善き生」と信仰の関係について考察する。ここでは、世俗化した自由民主主義の原理とイスラム教などの宗教的实践との対立や、スピリチュアリズムの擡頭を視野に入れながら、世俗的世界観の自足性に対して疑問を提示し、改めて信仰の意義を提示するテイラーの主張の意義について、再検討が企てられた。

第2部に引き続き、第3部も「現代の市民社会と公共性」をテーマとする。KIM, Sun-Wook報告では、レイチェルズやジジエクの言説と、アレントの行為action概念との比較を通じて、複数に存在する人々が創り出す公共空間における幸福の在り方が模索された。そしてそれを基礎に、アレントのアメリカ革命論と2008年ロウソク集会を重ね合わせて分析するなかで、韓国現代史の再解釈が試みられた。平石報告では、1980年代末以降の現代英国において一つの争点となっている「能動的シティズンシップ」(active citizenship)の理念について、D・ハード、D・G・グリーン、B・クリックの議論を比較しながら、その可能性と問題点が照射された。ここでは、福祉国家政策の行き詰まりを克服する形で登場した能動的シティズンシップ論が、その先で、文化的・民族的多様性をいかに認めながら市民社会としての紐帯を形成するか、という(今日の日本や韓国にも通じる)根源的課題に直面していることが明らかにされた。

第4部は、日本、韓国を含め東アジア世界における「善き生」と「公共」の来歴と行く末について、議論がなされた。相原報告は、日本近世の代表的な思想家である荻生徂徠と本居宣長が古の理想世界に生きた人々の善き生と公共性のあり方についてどう考えたのか、言語研究を導き手としながら明らかにする。その成果のもと、「奉公」の語に象徴されるように、日本政治思想の内側から「公」の領域と「善き生」とをどう関連づけるのか、今なお難しい課題を孕んでいることが指摘された。KOH, Hee-Tak報告では、近世日本における朱子学受容の展開を辿りながら、善き生を巡る思惟の転換を図った試みとして、伊藤仁

齋の「天下公共の道」論に光が当てられる。そしてそこに、「普通」の人々が生活世界に立脚しながら「下から」公共性を探究する、東アジアにおける「善き生」の積極的可能性が見出された。最後に、CHOI, Chi-Won報告では、ウェーバーの儒教研究を批判的に検討し、ウェーバーの視座からこぼれ落ちた問題にも目を配りながら、合理主義、道徳的自己完成と心情倫理、正統性と官僚制といった機軸を中心に、儒教における「公共」の両義的価値について問題提起がなされた。

以上の報告、討論をもとに、3日の午後から、場所を江華島へと移し、そこで全体的な総合討論が行われた。韓国政治思想学会の方々の多大な尽力と心暖かい配慮により、学問を通じた密度の濃い交流が図られ、成功裡のうちに閉会した。

手作りで進められてきたこの共同学会も9回を数え、様々な専門領域の会員が横断的に携わり、年々その交流は広がりを見せている。来年の記念すべき第10回大会は、成蹊大学で開催される予定である。そこでは、韓国からだけでなく、中国、台湾から報告者、討論者を招聘することも検討されている。このこと自体、これまで多くの会員諸氏に支えられながら、日韓の間に深い信頼関係が築き上げられてきたことの証左でもある。次回大会がさらなる飛躍の機会となることを心から祈念する。